カルデアに見捨てられたので単独で特異点巡ります

脳みそ縛り

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カルデアに捨てられた。どうしよう。

――そうだ、旅に出よう。

チラ裏に移ります。

目次

第三特異点 ―― 1
新たな従者 ―― 8
情報収集 ―― 15

第三特異点

自慢じゃあないが、うちの家はそこそこに裕福な方であったと思う。

家は屋敷で、庭には奇怪な模様が描かれるほどには広かった。それだけ大きい家を掃除をするのは母ではなくお手伝いさんであったし、父は数えきれないほどの本に囲まれていた、時々あるパーティーに向かう際の俺のおめかしは豪華だった。一人っ子だったから甘やかされることもなかったし、挫折も何度も味わった。かと言って厳しすぎることもなく、愛を確かに感じられる、そんな家だった。

そんな家に生まれた俺はすくすくと育ち、親から学びながらも、魔術師となった。正確には魔術使いと呼ばれる人間なのだが、そんなことは大した問題ではない。重要なのは俺が魔術に関わっている人間だということだ。

それは、２０１６年のことだ。人理は焼却され、世界は滅亡へと追い込まれた。

それを救えるマスター候補生は世界に俺ともう一人の二人しか残らなかった。俺はマスター適正を持つ人間の、その片方になってしまったのだ。

爆弾によるテロを受けたものの比較的傷の浅かった俺はコフィンの中で目を覚まし、サーヴァントであるダ・ヴィンチや医者であるドクターロマニの看護を受けることで、第一特異点から復帰。サーヴァントを召喚しマスターとなって、第一マスターである藤丸立花と共に竜の魔女を撃破。第二特異点も協力することでなんとか突破し、いよいよ折り返し付近ともなり第三特異点、その終盤に差し掛かった頃のこと。

俺に不幸が降りかかった。

メディアリリィは己に課された役目と言うのをよく分かっていた。だから呼び出す魔神柱を一体だけ済ませるようなことはしなかった。魔神柱は、別行動中である俺たちの所にも現れた。

俺のサーヴァントはスナイパーだ、遥か遠く遠く、肉眼では目視は

不可能なその場所に寸分の狂いなく当てられる。クラススキルである単独行動を持っていないからマスターが常に側に居なければダメな所がたまに傷ではあるが、スナイプ自体に支障はない。
それを活かした役目を請け負って、こうやって群島の一つに構えていたのに、それがこんな形で裏目に出るとは思ってもいなかった。
いや、こうなっても仕方ないのだろう。実際俺は自惚れていたのだ。サーヴァントの力を自分の物だと思って、サーヴァント自身の力を過信していたのだ。その隙をこうして良いように付け込まれてしまった。自業自得に他ならない。だから戦った。
我が家の魔術で雀の涙程度の妨害しつつ、その隙を見逃すことがないサーヴァントと共に戦い、見事勝利した。サーヴァントと魔神柱は相討ちであったが、これはまだ問題ではない。申し訳ないと思う気持ちはあったが、カルデアを仲介として契約したサーヴァントは座に変えることなく、討たれたとしてもカルデアに帰ってくる。多少のタイムスパンはあるが、彼女とは無事再会を果たせる。
帰ったら感謝の気持ちを表して、ちゃんとお礼の一つも言おう。帰るための報告のためにと魔術を行使しようとした、その時だった。
森の奥から、その巨体が現れたのは。
金色のタテガミ、妖しく光る紅の眼光、そして恐ろしいほどの魔力。合成獣（キメラ）が牙を向けて、天へと咆哮した。
合成獣（キメラ）自体は大した脅威ではない、相手の弱点を的確に見抜く知能と研ぎ澄まされた野生の勘は恐ろしくはあるが、霊基向上したサーヴァントの敵ではない。知能は高くとも所詮は獣であることに変わりはないのだから。だが、こちらにもうサーヴァントはいない。攻撃するほどの魔力も残っていない。
詰んでるとも言えるこの状況。だがまだ手段はある。
戦闘服に積んであるガンドの機能を使い、その場を脱出しつつ、通信を行使した。
「ドクター、ドクターロマニ！」
《あぁよかった、無事だったんだね！　状況の報告は!?》
息を切らしつつ報告を行う。魔神柱はサーヴァントと相討ちに

なったこと、キメラに襲われていること、そして攻撃に転ずる魔力も残っていないこと。その上で二つの提案をした。
「立花のサーヴァントをこっちに送れないか!?　従わない奴でもいい、とにかくキメラを妥当できるレベルの奴だ！」
《無理だ！　今立花君は魔神柱との戦闘中だ、向こうはメディアリリィもついていてしばらく決着は着きそうにない！　長期戦で向こうへのサーヴァントの配給を止めてしまって彼の身が危ない、しかも相手には聖杯もついてるんだ。手を抜くことなんて出来ない！》
「なら強制帰還だ、そっちはどうなんだ！」
《それなら問題ないはずだよ！　強制帰還準備！》
　随分と距離が離れたところで、木の幹に隠れて息を整える。最後にとんだハプニングが起こったが、なんとか無事今回も役目を果たせそうだ。そう、安心したところだった。
《だ、駄目です、帰還システムに異常！　強制退去以外始動できません！》
《なんだって!?》
　絶望の足音が聞こえてきたのは。
「……は？」
《レオナルド！》
《もうやってる！　あぁくそなんだこれ、見たこともないバグだ！　いやウィルスか!?　くそっ、こんなの一時間や二時間で終わらないぞ！》
《ここはあらゆる時空域から隔離されたカルデアなんだぞ!?　ウィルス混入なんてできる訳がない！　事前に仕込まれたバグだとしても、発症が遅すぎる！》
《だが実際にこうして問題は起きている！　なにかしらの影響を受けたとしか考えられない！》
　ひたり、ひたりと聞こえてくる。
「……おい嘘だろ。強制退去しかないって、冗談じゃないぞッ。ドクター、向こうの戦闘は何時終わるんだよ!?」
《……すぐには終わらない、まだ光明すら見出だしてない状況だ。3

０分……いや、一時間……》
「そんなに逃げられるか！　こんな小さな島で逃げ切れる訳ない！　しかも海にも敵対生物がうじゃうじゃいるんだろ!?　泳いで逃げられない、いやそもそもあいつが泳げるかもしれないんだぞ!?」
《落ち着いてくれ、まだ救いがないと決まったわけじゃない。今スタッフ総出でウィルス撃退に全力で取り組んでいる。ダ・ヴィンチちゃんもいるんだ、きっとそう時間はかからない》
「勘弁してくれよドクター、そんな気休め言ってる場合じゃないのなんて分かってッ……！」
　言葉は最後まで紡げなかった。息が詰まったわけじゃない、先が思い付かなかったわけじゃない。突然の体の変調に、襲い掛かる違和感があまりにも大きすぎたから。体が少し軽くなったような感覚に、どこか物足りない空虚感。肩から伝わってくるような気がすると目線を向ければ、肩の四割ほどが消し飛んでいた
「――――あ、あああァァァァァあああああああッッッ！」
　熱い、熱いっ。熱いッ。傷口が熱した鉄棒を押し付けられているかのように熱い。痛みだとか、違和感だとかはもうどこぞへと吹っ飛んでいた。今は、ただただその熱に狂いそうになるしかなかった。
「肩が、俺の肩がァァァァあッ！」
　なんだこれは。どうすれば逃れられる、どうすれば終わる、どうすれば感じなくなるんだ。
　わからない、何がどうなっているんだ。
　そもそもどうして俺の肩はこんなことになったんだどうして俺はダメージを受けているんだどうして俺はこんな目に合わなきゃいけないんだ。
　混乱した考えを抑えることもできずただ絶叫をあげる。通信からは何も声が聞こえない、どうして何も言ってくれないんだドクター、あんたが役割を放棄するなんて間違ってる。
　その時、血に飢えた獣のゾっとする唸り声を耳が捉えた。
「ひっ……！」
　合成獣（キメラ）だ、間違いない。奴がすぐ側に来ているんだ。

もう駄目だもう嫌だもう無理だ。逃げなければ、逃げなければならない。
何処にだとか何時までだとかそんなこと考えてられない、逃げるんだ。死にたくない、まだ生きていたい。
死にたくない、死にたくない。
肩を押さえて走り出そうとして、力強い何かに引っ張られる感覚を味わう。いや、引っ張られるというより、引っ張ろうとしているがこちらの力が足りていない感覚に似ている。まるで固定されたかのような足を見てみれば、蛇が睨みを効かせて人の脚に牙を立てていた。牙は、俺の脚を貫通していた。
「ぎっ、あああああァァァァァッ！」
熱が二つに増える。思考が何も纏まらない。ただ心の底で、もう助からないんだなという絶望だけが、泥のようにあっては沸いてくる。
俺はもう死ぬんだ。
「嫌だァッ！　死にたくない、死にたくない！　食われたくない、こんな死に方したくない！」
声は届いても、聞き届けてはもらえない。
獅子が口を開く、鋭利に作られたその二対の犬歯は、なんの抵抗もなく俺の肉を切り裂くだろう。そこから逃げる術はない、絶対的な死がそこにはあった。
「助けて、助けてっ！　ドクター、ダ・ヴィンチ、立花、マシュ、アーチャー！　助けてくれェッ！」
《――大仁君》
ドクターの優しい声が聞こえる。
《君の存在は、とても立派だった。世界を救うなんて重責、並の人間では耐えられないだろう。だから君は、本当によくやったと思う。前だけを見続けるその姿勢は、もう一人のマスターとして多くの者に希望を与えたことだろう》
「ドク、ター？」
なんだ、その語りは。やめろ、やめてくれ。そんなことをしている暇があったらこいつをなんとかしてくれ！　俺を逃がしてくれ！

俺を助けてくれ！
《――――大仁　陣。お疲れ様。君のことを、絶対に忘れたりはしない》
　それは、俺の生存を諦めると断言したも同然だった。
「ふっ、ざけるなドクターッ。なんでだ、なんでそんなことできるんだよ！　同じ世界を救う仲間だろ、これまで頑張って来たじゃないか、なんでそんなに容易く俺を見捨てられるんだよッ！」
　死にたくない、死にたくないんだ。本当なんだ。嘘じゃない、俺はこんなにも生きたがってるぞ、見てわかるだろ聞いて理解できるだろあんたはドクターなんだから察することができるだろドクター。どうしてそんな顔で笑ってるんだ、どうして通信を切ろうとするんだ。
　やめてくれドクター、俺は死にたくない。見捨てないで。
「嫌だ、嫌だ！　死にたくない、食われたくない！　こんなの理不尽だ、俺は立派に戦ったのに、俺は俺の役目を果たしただけなのに、なんでこんなことになるんだよ！　あんまりすぎるだろ、報われなさすぎるだろ！　こんなの、人の死に方じゃないッ！」
　ドクターは何も言わない、ダ・ヴィンチでさえも、カルデアのスタッフすらも。応えはない、ここで俺は一人で死んでしまうのだろうか。
「嫌だ、そんなの理不尽だッ！」
　どんな人類も必ず味わうであろう理不尽の重さ、痛み、辛さ。それは古くからも変わらないし、恐らくこれからも変えられない。こういう時、ジンクスを信じる人の気持ちが痛いほど分かる。何かにすがらなければ、何かのせいにしなければ、やっていられない。それこそ狂ってしまう。
　俺のせいじゃない、俺のせいじゃない。悪いのはなんだ、アイツらか、それともアイツらか。わからない、何も分からない。でも俺のせいじゃない！
「理不尽だ、理不尽だ、理不尽だ！　死にたくない、理不尽なんかのせいで……」
　牙が降り下ろされる。絶対に命を断つ、死神の鎌が如く。
　右手の呪いが、赤く熱を持った気がした。

「死にたくないッ！」

光が迸る。視界が赤に染まり、黒が過る。最後に青空が一杯に広がって、

思考が途切れた。

新たな従者

理不尽とは、万人に降りかかるものだ。

何時、何処で、何をしているときに来るのか。それは誰にも分かりはしない。全てにおいて万全を期していれば理不尽であろうと跳ね返せるかもしれないが、そう出来ないのが欠点であり、人間である。

そして理不尽は時として不幸だけでなく死を招く。地震、津波、落雷、台風、日照り、飢饉。形は様々なれど、どれも人の手の届かぬ最上位の理不尽。そういう物に人は畏れを抱き、何時しか蔑ろにしてはいけないという気持ちを産み出し、そうしていつの間にか敬意となった。

曰く、それは怒りである。曰く、それは悲しみである。曰く、それは試練である。人の届かぬ者達がいると仮定し、そしてそれに押し付けることこそが人類が取った責任放棄であった。

敬意は想像を募り、想像は象られ信仰を産んだ。

そういう経緯で、我々は産み出された。

◆◆◆

深い微睡みに入っている。なんだか心地がいい気もするから、何も考えずに暫くそうしていないように思えていた。柔らかな質感が全身を包んでいるのが分かる。布団だろうか、にしてはなんだか暖かいし水っけすらも感じる。こういうのを、なんというのだろうか。油揚げ？　湿気たコットン？　シリコン？

あぁそうだ、これはこう言うのだ。

人肌の温もり。

「……あぁ!?」

急に意識が浮上した。人肌だ、紛うことなき人肌に間違いない。しかもこの柔らかさは男のものじゃない、ガサガサしてないから絶対に男のものじゃない。男のものだったら不能になる勢いで落ち込むだろう。

「おぉマスター、目が覚めたか」

トーンの高い声が耳をくすぐった。これは、あれだ。予想が正しけ

れば我が眼を疑う光景がそこに広がっていることだろう。
　見たくない、しかし男としては今見なければ一生後悔するような気がする。男子高校生において優先すべきことは理性〈〈〈〈〈〈(越えられない壁)〈〈性欲なのだ。
　そうつまりこの先には、R指定が待っている。しかしここは男として紳士的になりぐっと我慢する所ではないだろうか？　彼女が誰だか知らないが少なくともうちのアーチャーではないうちのアーチャーは絶対にこんなことをしたりしない。あの世話焼きがこんな火に石油をぶちまけた挙げ句リンボーダンスを始めるような真似をする筈がない。してたら俺はとっくの昔に肉欲に呑まれているあぁ間違いなく呑まれている。
「……なんだ色々考えてる奴だな。何でも良いが、姉には筒抜けな故それ以上妄想を膨らむのはやめておいた方がいいぞ」
「はっはっはっ、男な物でして」
　すっと目線を自身の胸へと向けて、あぁやっぱりと思った。
　俺という男は現在進行形で、裸の女に布団代わりと言わんばかりに乗っかられている、所謂肉布団(その胸は豊満)状態を味わう羽目になっている。通りで色々と柔らかいと思ったありがとうございます。
「ふぅむ、最近の愛し子はこういうのを好むのか。慎ましさ等微塵も感じさせん、ぶっちゃけ悪趣味以外の何物でもないと思う訳で、そこのところどう思ってるんだ？」
「最高だと思います」
「欲まみれだな」
　けらけらと笑って会話を区切ると、彼女はベッドから離れて何処からか取り出した衣服を身に付ける。もう少し味わいたかったのだけどなぁ……。と、ここで違和感。
　どうして俺はあんなにも人肌を直に感じ取れてしまったのだろうか。すっと視線を下ろしてみると、そこには逞しくも天を仰ぐ息子の姿が。
「……すいません、俺の服どこっすか」
「ふむ、ふむ。……ん、あぁ、そこだ」

感想を述べられても辛いけど、何か言うわけでもなく流されてしまうのも辛いのでやめてほしいです。男子高校生の心の脆さは異常なんだぞ。

さて、と服を着替えたところで気分も変わって、色々と疑問も沸き出してきた。

「えっと、まずだけど、サーヴァントってことでいいっすかね」

「おう、そこは間違いない」

やはり、と思った。彼女の身に付けた衣類は髪色と同じく黒い生地が使われている色々とすけすけなドレスではあるもののアジア系の和風を思わせる雰囲気であった。

それに、感じられる魔力の質も桁違いだ。隠しておいてこれなのか、それともヒントを出すためにわざと出しているのかは定かではない。いずれにしても、まるで底を感じさせない恐ろしさを秘めていることだけは間違いない。

「それで、さっき言ってたマスターっていうのは……」

「目の前の愛し子、つまり弟のことだな」

弟って、もしかして俺のことを言っているのだろうか。俺はこんな年上の姉を持った覚えはないどころか一人っ子なのだが、どういうことだ。そういえば、さっき一人称もなにかおかしかったような。

「弟っていうのは？」

「私が姉だからな、であれば愛し子が弟なのは当然の帰結。故に、敬語は不要だ」

頭がこんがらがってきたぞ。愛し子というのは自身の子息に向けて言う言葉だ。そして弟は兄弟だし、姉は姉妹だ。つまり俺は息子でありながら弟でありマスターだった？　ダメだ変なことを考えたら余計に混乱してきた。ここまで酷いのはロムルス様以来だ。

「そう難しく考えずともいい。一番重要なことはマスターが弟であること、なのだからな」

「……おっけー、弟であることはまぁいい。でも俺の名前は大仁　陣だ。呼ぶならちゃんとそっちで呼んでくれると助かるんだけど」

そう苦言を漏らしてみるが、彼女はくすりと笑って善処させてもら

おうとだけ答えた。
　する気ねぇなこいつ。だが言ったからには考えてはくれるだろう、スパルタクスのようなバーサーカーでも無さそうだし。今はその時を待つとしよう。けど可愛がられるのは慣れてないから出来るだけ早めにお願いします。
「それで、あんたのことはなんて呼べばいいんだ？」
「ふむ、姉のことか。姉、姉貴、姉御、姉ちゃんお姉ちゃん、姉さんお姉さん等々バリエーションは豊富だぞ。因みにおすすめはお姉ちゃんだ」
「はいはい、クラス名がシスターな訳じゃないんだから、さっさと教えてくれ」
　そういえば世の中にはエクストラクラスのサーヴァントがいると聞いたことを思い出す。代表としては裁定者クラスであるルーラーが挙げられるだろう。だからと言って目の前のサーヴァントがシスターとかいうエクストラクラスであるわけがない、と断言できれば良かったんだがちょっと自信がなくなってきた
　あいつらほんとなんでもありだからな。
「つれない奴め。クラスはアサシンだ、暗殺が得意なわけではないがな」
「おっけー、アサシンな。それじゃあアサシン、俺とあんたはいつの間に契約したんだ？」
　少なくともパスを自分から繋いだ覚えはない。というかこんな魔力からして凄そうと思えるはぐれサーヴァントと契約できるような気がしない。
　どう考えても立花案件のサーヴァントだぞこいつ。
「その前に、一つ確認のほどをいいだろうか」
　質問を質問で返すのは礼儀がなっていない、と言いたいところだが明らかに強そうな奴にサーヴァントだからと上から物を言う態度なんて取れるわけもなし。素直に掌を向けて譲る仕草をとった。
「弟は、どうしてベッドに寝込む羽目になったのか、覚えているか？」
「……」

正直、痛い質問だった。どうしてここにいるのか、という質問であれば答えられた。それは俺がカルデアに見捨てられたからだ、それはハッキリと言える。しかし、分からない

どうして俺はここにいるのか、それが全くわからない。

すっぽりと、何かが抜け落ちているのだ。何か、俺の身にあった何かを、思い出すことができない。忘れているのでもないと思う、ただ漠然と無いのだ。そんなもの、初めから無かったと謂わんばかりに。

俺に一体何があったと言うのだろうか。体は健康そのものだ、どこにも傷一つありはしない。だがこの違和感、俺は一体どうなったんだ？

「答えられないのなら構わない。姉としても責めたいわけではないんだ」

「……悪いなアサシン。嘘をついたり、疑ってるわけじゃないんだが……」

「いいんだ、分かってるよ。弟のことだからな」

俺、あんたの弟になったつもりは更々ないのだけど。

まぁ、いいか。どうせ何しても無駄だろう、アサシンの癖にバーサーカー並に考えが読めない女だ。訂正したって耳を貸したりしないだろう。

「失礼だな、姉はこれでも融通の聞く気配りの出来る存在だと自負しているのだが」

「……あぁ、考え読めるんだっけ？」

さっき筒抜けがどうのこうの言ってた気がする。しかし本当かどうか、少し疑わしいと感じる部分がないのかと言われれば、少なからずはあると答えられる。

「その考え、分からないでもない。ならば是非もなし、証明して見せよう」

「ほう、どうやって？」

「ふむ……そうだな」

じっ、とこちらを見るアサシン。絶妙に目を合わせないところに、魔術やハッタリを使っているわけでもないという証明をしようと意

地になっている部分が見受けられた。しかし、考えを読むだけでそんなに集中する必要が一体どこに、
「上から三番目のファイルとやらの中」
「……は？」
「そうその中にある高二の頃の写真を纏めたファイルの中に区分されている春ファイルの中にある五月ファイルの中にあるバイキングファイルにある飯ファイルと銘打って偽装しているファイル」
「ちょ、まっ」
「暗号は……なんだ幼稚だな、好きな売春女の名前とは。高橋しょ……」
「ＯＫわかった万事分かったっ！　お前が覚かなんかの部類ってことはよーく分かった！　これから信用することにする！　だからもう勘弁してくれ！」
　なんの公開処刑だよこれ！　親にすらバレたことの無い俺のおかずファイルを見事的中させやがって、悪いかよ高橋しょ○○好きで！
　ぐうしこなんだよ！
「ふふん、それでいいんだ。これからは姉をちゃんと敬うように」
「へーへー。全く厄介な……どこの英霊だよ」
　ドレスを着ているところを見る限り、少なくとも大昔の日本人という訳でも無さそうだ。しかし外国人にしては顔付きがアジア寄りだ。在日二世か。しかし在日二世に人の考えを読むような英雄がいただろうか、いやそもそも人の考えを見通すことのできる英雄なんてそれこそ限られているはずだ。
　こんなことならマシュを見習ってキチンと勉強しておくべきだったな。
「その、なんだ弟よ」
「なんだよ」
「あんまりこっちを、特に顔を見ないでくれるか。人に見つめられるのは、慣れていないんだ。……本当に」
　そんなことを言っては目を伏せて顔までそらす徹底ぶりを見せる。
　なんだこいつ。人の一押しＡＶ女優当てておいて、急に生娘みたい

なことし始めやがって。
　これがギャップかくそったれ。
「……おっけーわかった。話は変わるが、いいかアサシン」
「あぁ。因みに顔を見るのはいいが三秒以内にしておいてくれ、それ以上は私の心臓がつらい」
　めんどくせぇなこいつ。
「随分と部屋の内装が洋風なんだけど、ここって一体どこなんだ？」
「ん、そうだな。まずは状況確認が先だったな」
　うっかりしていた、なんてことをもらしてベッドを立つ。そのまま光が遮断されている窓まで近づくと、音を鳴らしてカーテンを開いた。
　まず見えたのは夜空の星々、その次に見えたのは布を被ったりお手製の何かを身につけ徘徊している子供たち。そして子供にお菓子を配る大人たちと、それらを彩るかぼちゃのランタン達。
「……おいおい、これって……」
「あぁ、その考えに間違いはないぞマスター」
　こんなの、現代人なら誰にも分かる。でも俺は分かるからこそ困惑している。だってこんなことしてる暇もなければ、こんなことするわけもないし、できる環境でもないんだ。そう、
「――ハロウィン」
　こんな、お祭りなんて。

情報収集

体への異常は感じられなかったので、とりあえず部屋の外に出てみることにした。

カルデアではほぼ自動的と言っていいほどに食事が勝手に出てきたがこの身は既に捨てられた身、食事をするにしても何をするにしても金が必要になってくる。

アサシンに言えばどうにかしてくれるだろうが、任せてばかりでは愛想をつかれてしまう。アサシンにまで捨てられてしまえば、今度こそ俺に救いはない。そこらで餓死して白骨化するのがオチだろう。故に行動を起こすべきだ。

とは言ったものの、現在地もわからなければいつの時代の特異点であるかもわからないのが現状だ。町並みから西洋であることは間違いないのだが、それ以上は何もわからない。ここにマシュやダ・ヴィンチがいれば町並みだけで建築方式を見破って時代を特定してくれるのだろうけれど、俺にはそんな知識も目もない。

しかし過ぎたことを振り返って高望みをするのは良くないことだ。なんにしても、まずは現状把握だ。

「そもそもアサシン、どうして俺たちはここに来れたんだ？　ここってどこからどう見ても第三特異点と別の時代に見えるんだが」

情報を得るために街を巡る最中に、質問を投げ掛ける。

カルデアにあるあの地球儀も無しに転送するなんて、そう簡単に出来ることなのだろうか。俺は魔術使いだから、本職とは違って然程詳しくはないのだけれど、かなり難しいことだろうと言うことはなんとなく理解できる。あれか、所謂時空の歪みに巻き込まれたうんたらみたいな。

「あぁ……そうだな、それは私がやったんだが……」

「やったのか!?」

時空転移とか魔法使いぐらいじゃないと出来なさそうなことさらっとやったとか言ったかこのサーヴァントは。もしかしてアサシンはアサシンでもキャスターであったりとかダブルクラスであった

りとかするのか？　それか魔術：Ａのスキルを持ってたりとか？
「いや、正確に行ったのは姉ではないぞ」
「は？　……ん？」
「とにかく、私はアサシンであることに変わりはない。疑うのなら、ステータスを透視してみたらどうだ」
　アサシンは足を止めてこちらを見てきた。
　別に疑っているわけでなく、単に言っていることの真意がつかめなかっただけなのだが……しかし自分の本心が彼女を全て信頼していると言えば、違うのかもしれない。ここは彼女を本当に信頼するために、少し覗かせてもらおう。ステータス透視は、スキルとかそういう辺りがその人の人生に関することだから、あんまり覗きたくはないのだけど。
【クラス】アサシン
【マスター】大仁　陣
【性別】女性
【身長・体重】１６０ｃｍ　４１ｋｇ
【属性】混沌・中庸
【真名】
【ステータス】筋力：Ｃ＋　耐久：Ｄ＋　俊敏：Ａ　魔力：Ｂ　幸運：
―　宝具：
【クラス別スキル】『気配遮断：Ｃ』
【保有スキル】『単独行動：Ｄ』『変　魔：　』『　術：Ｃ』『　　：
　　』
【宝具】『　　・　　』『　　三　　』
「……ほとんど視認できないんだが？」
「姉とてそう易々と肌を晒すほど尻軽ではないさ」
　そう言って耳を隠すほどの長髪を揺らして正面へ向き直した。
　それはつまり、俺をマスターとして認識してはいるが、真に認めているわけではないと言っているも同然だった。結構親身にしてくれていたから勘違いしていたが、そもそも俺のマスター適正自体は立花よりも低い。誇れる物なんて魔力が普通の魔術師より多めな点ぐら

いなもので、それ以外は正直並以下。そこら辺は立花とすらどっこいどっこいだろう。
　それに俺はまだこうして現状を把握しようとしている以外の行動なんて起こしてもない。それで信頼を勝ち得る訳もなし。
　なら、ここからだ。
「……よし、わかった。アサシン、ここは特異点であることは間違いないんだよな？」
「ん、あぁそうだな。とりあえず近場の漂ってる所へ飛んできたからな」
「今のところ、殺意とかピリピリとした感覚とかはないか？　戦争が起こりそうであるとか」
「そういうのは感じられないな。むしろ平和すぎて誰もが気を抜いているから、気を巡らせているのがバカらしくなってくるほどだ」
　ならそう焦る必要はないか。少なくともここら辺は戦争やらなんやらとは無関係のようだし、確実に情報収集するとしよう。幸い、こちらにいるのは単独行動持ちのアサシンだ。
「アサシン、周辺の見回りを頼めるか。この特異点の大まかの広さを知っておきたい」
「相分かった。マスターはどうする？」
「情報収集をする。具体的には貨幣や相場だな」
　今行動を起こしたとしても、どんな伏兵に合うかもわからない。いや何よりも、知らずに行動した結果の先に敵に回ったのがこの世界の一般人であった、なんて事があっては行動を制限されるどころの話ではない。
　というか、多分俺は生き抜くことすら不可能になるだろう。食料や水を確保できないどころか、睡眠時間を確保できるかも怪しいところだ。
「うむ、次第点だ。今は事を急いても仕方がないからな、そこは分かっているようだな」
「じゃあ、惜しい点は？」
「地名や街の状態だな、人に困っている所であるとか噂を調べておく

のも重要だ。この町に滞在するのであれば、尚更だな」
そう言われてそこを完全に見落としていたに気づいた。いや、正確にはそれよりも酷い意識の外という場所にあったのだろう。今まで知識人に投げていたつけがここになって来ているのが痛いほど理解できた。
精進あるのみ、か。
「だがこんな状態で冷静な判断を出来るだけで十分上出来だ。これからに期待させてもらうぞ、弟よ」
「精々裏切らないよう、出来る限りの努力はさせてもらうよ」
さて、では行動開始だな。

◆◆◆

一通り歩き回った所で、この街の情報を整理するために持っていたペンとメモ帳を取り出す。
まずこの街の面積自体は然程大きなものではなかった。東から西へ、端から端まで歩いてかかった時間大体１５分ぐらい。毎分大体７５歩ほどであったから、歩数に換算すれば１１２５歩、一歩を大体一メートルだとすれば、多く見積もっても１１２５メートル、１キロほどの町であるのとわかる。町というより、村並の小ささだが。
ある店と言えば八百屋と鍛冶屋、それに酒場に服屋ぐらいなもので、これらのことから少なくとも近代からはかけ離れていることぐらいしかわからない。先程も言った通り、俺は建築様式に詳しくはないので時代を特定することは不可能に近い。
ただなんでも鉄で作られている辺り、本当にかなり昔であることはわかる。世界史の授業で言っていたルネサンス期ぐらいだろうか、しかしルネサンス期に特異点になり得るほどの大きな出来事が存在していたのか、これが分からない。
「……分からないこと考えても仕方ないか」
一旦この事からは離れるか。次はこの町の内情についてでも綴ろう。
まさか親に内緒で学んでおいた翻訳魔術が役立つ日が来るとは思わなかったが、十分に活用しこの町について酒場にいた呑兵衛に聞い

てみた。
貨幣を見せてもらったが、よくゲームで見かけるような西洋にありそうなものだった。金貨大銀貨銀貨等々。しかしこの金貨に掘られている女性、見覚えがあるような気がするのだが、気のせいだろうか。
次に相場の話だが、ぶっちゃけ俺に相場のことはよく分からない。ただおじさんの感覚からすれば随分良心的な物であるらしい。領主がちゃんとしているからなのだろか、一度顔を拝んでみたいな。
さて、最後に仕事の話だ。
先程も述べた通りこの町は非常に小さいわりには人口密度が思ったよりも高いので、人の数には然程困っては無いとのことだった。確かに店の規模はどれも小さいから人手もあまりかからない、しかも店自体も大きくする気がないようでますます人手は充実しているとのことだった。
畑仕事などの農作業は人がいくらあっても足りないイメージがあったのでそっちの方面で攻めてみると、そんな柔い指の人間に頼むほど困ってないだろうよと笑って言われてしまった。
しかしただで金が貰えるわけでもないのに働き口がないのは非常に困る、というのが表情に出ていたのだろう。一つだけ町人では解決できない問題があると、その呑兵衛は神妙な顔をして口を開いた。
「モンスター？」
「あぁ、そうさ」
モンスターと言うと、化け物という意味のモンスターだろうか。そう言われると大物な感じがしてなんとなく不安に思っていると呑兵衛が口を開いた。
「この町には入り込んでは来ねぇんだが、町の回りにはうようよといるのよ」
「そんなに多いのか」
「そう不安そうな顔をするなよ、町には入って来ねぇんだからさ。それに、モンスターっつってもドラゴンとかがいるわけじゃねぇんだ。ウェアウルフ、スケルトン、ゴースト。大まかに挙げたらこんなもんか」

陳列して出てきたそのモンスターの名前にはどれも聞き覚えがあった。
ウェアウルフは成人男性の二倍はある大きさの魔物で、主に武器を持って飛びはねたりお得意の速さを使って襲いかかってくる厄介な敵だ。しかしそれよりも面倒なのは眼と嗅覚、それと勘がいいのか弱点をついてくることが多いことだ。どんなサーヴァントでもつかれてはダメージになり得る部分というのは存在する、その為まともに受けては英霊と言えど油断は出来ぬほどだった。
スケルトンはその名の通り骨だ、呪いやらなんやらだけが筋肉の代わりにその体を動かしているからか、思考力がかなり欠如しているため御しやすい相手、凪ぎ払いやすい敵と言える。だが数が多く、まともに相手をしていてはキリがない、なんてこともざらにあった。楽ではあるが、油断せずに相手する必要があるだろう。
ゴーストはそのまんま、幽霊だ。スケルトンと違って明確な意思というものがあるのでそれよりは厄介な相手である。攻撃方法は呪いを主軸としているものだから、サーヴァントと言えど油断していたらポックリお陀仏なんてこともある。ただそのままが霊体なので魔術に弱いという弱点があるため、上手くついていきたい所だ。
「他にもワイバーンや岩の巨人がいるなんて話を聞いたが、酔っぱらいが多いからなぁこの町は」
「けど町には入ってこないんだろ？　どこに困るんだ？」
「ばっかお前ぇ、この町に畑があるように見えるか？　森や鉱山があるとでも？」
「……なるほど」
少し考えれば分かることだった。町に入れば安全ではあるが、この時代は今と違って町の中にいるだけでは生きていけない。農業を生業とする人は畑に出向かわないといけないし、肉が欲しければ森に向かわなくてはならない。木材も木を切り出しに行かなくてはならないし、鉱山に居なければ鉱夫は稼げない。
町を出るということは、即ちモンスターと戦うことを意味するのだ。

「傭兵なんかもいることはいるが、何せ数が少ねぇもんだからよ。カバー仕切れてねぇのさ」
「……なぁおじさん、そのモンスター共を倒したら、報酬は貰えるのか？」
「は？　そりゃあ貰えるだろうが……本気かよ坊主、鍬も握ったことねぇ腕してるくせに、そいつぁ無茶ってもんだ。止めときな」
「物を振り回すだけが戦いじゃないさ。これでも自信はあるつもりだぞ」
　サーヴァントに守られていたとは言え、一応二つの特異点で生き残ってきてるからな。そこらのモンスターに一方的に殺られるほど無力な訳でもない。それに戦うのは俺一人じゃない、メインを張ってくれるのはアサシンだ。確証はないが、あれは多分すごいサーヴァントだ。ウェアウルフ共程度、相手にもならないんじゃないだろうか。

　とにかく自信はあるんだ、という目で見ていると呑兵衛も諦めがついたのかため息をついた。
「分かった分かった。俺は畑を持ってるんだがな、毎年収穫の時期になると奴等がよく出てくるのさ。明日がその収穫の日なんだが、例に漏れず奴等が出てくると思う。お前さんにはそいつらを追い払ってもらいたい。ちゃんと出来れば、それなりの報酬をやる」
「分かった、任せておけ。それじゃあ、どんなモンスターが出るのか教えてくれ」